

比較哲学から統一哲学へ

——その発展可能性と危険性——

大江 精 三

比較哲学から統一哲学への発展可能性はあまりにも多い。それだけにそこにはいろいろな混同や早合点の危険性が待ち伏せている。そして、それに現代の科学技術の急速な進歩が拍車をかけているようである。

1

いまや世界的な文化の国際的交流が進んでいる。それらの文化を精神的に担っている宗教や哲学や政治の思想体系の間の比較研究ということも当然さかんである。原始文化についての人類学者や考古学者の専門科学的研究はさておいて、現在この地球上に独立国ないし半独立国として活動している諸民族・諸国民の生活を現実に支えている諸思想体系の比較研究の仕事は、われわれ人間仲間の相互理解・平和共存、したがって人類種族の生存そのもの

にかかわる重大問題である。

さて、現在までのところ、比較哲学的諸研究の一つの結論は、チャールズ・モリスや中村元によれば、よく耳にする *East and West never meet. とうとう嘆声にもかかわらず、Human mind is neither Eastern nor Western. とうとうことに帰するようである*。また、最近の人間生態学・社会生物学等の進歩や人間の宇宙空間開発の進行は、ひとところ人類世界を不倶戴天の二大陣営に分断するかにみえた政治イデオロギー対立についても、群棲動物の集団欲望をこえて、同一生物種ホモ・サピエンスとしての共同意識の目覚めを育てているようであるから、比較哲学から統一哲学への発展可能性は二十一世紀に向かって少しずつ開けているようにさえ見える。しかも、その発展が半ば現代の科学技術の進歩によって助けられているかのようにも見えるのである。

しかし安易な楽観は禁物である。なるほど科学技術的知識の国際共通性や客観性は人類共同体の意識に繋がるものであるが、それをそれぞれに利用する各民族古来の伝統文化や各国国民固有の社会体制を担っている哲学的思想体系には科学的論議をも許さない実力があるし、他方、そのような思想体系は、所詮、形而上学としてのみ成立するものであって、いくら科学的知識に基づくところがあるといっても、決して専門科学のような知的強制力をもちえるものではないというのが、大多数の現代科学哲学者の意見でもあるからである。

それゆえに、比較哲学から統一哲学へ、すなわち、比較哲学的諸研究によって、宗教や文化伝統の相異なる諸民族は相互の理解を積み重ね、相敵対する社会体制の間にも交互の利害得失の知見が深められ、やがて一つの統一された世界哲学の下に、二十一世紀にもなれば諸民族国家平和共存の地球人類共同体が出現するであろうなどと夢みることは危険である。まず、その所以を一おう明らかにしておく。

なるほど、現代の交通通信技術の進歩はまことに目まぐるしく、世界はその意味で狭くなる一方であり、人物の国際的交流もますます盛んである。しかも、現代の科学技術文明は少なくとも世界各国の大都市の生活環境をほとんど一様化しつつある。したがって、思想や文化もみな「文明を作る動物」としての人間の環境適応作業の所産であるとする現代の生物学的常識からすれば、現代

の人間が世界中でだんだん同一の思想文化をもつようになるのは自然の成り行きであるかのように見える。しかしながら、このような科学技術文明による生活環境の世界的均一化にもかかわらず、その同じ文明の利器を使って、われわれ人間は世界中で依然として対立抗争をくりかえしているのである。それは、言うまでもなく、生活環境の均一化によって一様化されるのは、まず行動の外形式であって、行動を内から統御する思想ではないからである。

比較哲学から統一哲学への発展が決してそれほど安全な道でないという主張は、このような常識論のほかに、その発展可能性の多様さに応じてそれだけ多様な根拠をもっていなければならないはずである。それを詳らかにするために、次に、社会生物学的、科学哲学的、情報科学的、三種三様の道の一つ一つ簡単に辿ってみることにしよう。

2

人類出現以前の地球上には、各生物種間のいわゆる天敵関係を含む一種の予定調和的な自然秩序が支配していた。人間は正にその自然的秩序の破壊者として地球の歴史に登場してきたのである。実際は二百万年以上もかかったらしいこの人間生成の全進化過程を一場のドラマとして神話化したのが旧約聖書創世記にある有名な『失樂園物語』である。周知のように、人祖アダムとエバは神の命に叛いて知恵の木の実を食べた罪によって「楽園」を追放さ

れたのであるが、失った「楽園」の中での天真爛漫な動物的自然生活の代りに、人間は自由に物を考える知性を与えられ、罪と死の意識に苛まれながらも、文明を建設して行かなければならなかったのであった。

長い長い旧・新石器文明の人類文化の「幼少年時代」をへて、紀元前五百年頃になって、東西まるで申し合わせたかのように花咲いた、人類文化の「青年時代」ともいうべき古代高度文明の世界を一つとしてみても、半ば砂漠的な荒々しい自然の脅威から理性的に人間を護ることを第一としたかのような古代ギリシヤの自然哲学的文明、黄河流域の穀倉地帯における混乱した下廻上の人間関係をなんとか理性的に秩序づけようとしたかのような社会学の古代中国文明、豊潤な自然の懷の中でもなお消え去らぬ生と死の不安からあくまで人間を救済しようとしたかのような古代印度文明、みなそれぞれに、人間の自由な理性的思考による環境適応の努力がにじみ出ているではないか。

しかしながら、「楽園追放」の後も人間はそれ以前の動物的先から、仏教で「無明」という、盲目的に利己的に生きんとする欲望（遣伝子生命）を受けついでいたのである。それはわれわれの誰もがよく知っているとおりでである。その後の人類文明の歴史も実に不断の戦いの歴史であった。野獣狩りの道具はそのままだ人間仲間との戦いの武器に変わっていったから、鉄製武器が広く人間世界に回りだした古代高度文明の時代は当然はげしい戦争の時

代とならざるをえなかった。アレキサンダー大王や秦の始皇帝の大覇業の時代であった。その中にインドのアショールカ王のような仏教による慈悲と正義と人間平等の君主を見出すことはむしろ一つの驚異である。

よく考えてみると、仏教（慈悲）ばかりではなく、儒教（仁）も、キリスト教（隣人愛）も、みな新しく造り出された危険な鉄製武器に対する乱用防止の歯止め役を果たすべき文明史的役割を担って生まれてきたものと言えるのであって、まるで東西申し合わせたかのように、多少のニュアンスの差はあっても、一様に「理性的思慮に基づく人類相愛の道徳」に帰するのであった。

しかし、各文明が各地域にそれぞれ殆ど独立に成長すればするほど、自然的人為的環境の変化に應じて、各地域文明の個性差は拡大し、その対立は強化され、また各地域内における分化も進み、むしろ激しくまず近隣相せめぎ合うようになって行ったのである。その最も悲惨な例が、十六・七世紀にわたって約百年間西ヨーロッパ世界を気違いじみた抗争の修羅場と化した宗教戦争であった。それが結局、新旧キリスト教徒がお互いの信教の自由を認め合ったウェストファリア条約（一六四八年）によって、互いに勢力範囲を協定して平和共存することになったのである。これを見ても、生来人間社会に思想統一（統一哲学）への饑望がいかに強かるうとも、無理な思想統一の持続が如何に危険なものであるかということは明らかである。人間的自由の本性に合わないからである。

ウエストファリア条約の基礎にある思想的寛容の大切さにこそ、われわれは注目しなければならない。

これが宗教の社会生物学的解釈から出発した独自の世界文明史的考察が少なくとも私に与えてくれたところの貴い「歴史の教訓」である。

3

現代の多人種、多宗教、多文化、多思想の人類世界において、公然と国境を越えて通用しているものは科学と技術だけである。正直に言って、厳密な論理数学的証明と精密な実験的検証とによって支えられた近代自然科学の知識のみがわれわれ人間の信頼をえる唯一の客観的知識であって、それには何人も抗し難い知的強制力がある。実際、物理・化学でも、電気工学でも、天文学や宇宙科学でも、飛行機や人工衛星でも、生物学や医学でも、万国共通である。それゆえ、諸科学が総合されて一つの統一科学を形成するならば、おのずから統一科学即統一哲学として、やがて全人類世界の思想・文化も統一されるだろうと考えられないではない。実際、そのような理想をいだいて、人類の学術思想史に新たな一頁を開こうとした科学的哲学者ないし哲学的科学者の一団が今世紀の最初の四半期にあった。それがいわゆるウィーン学団である*。

元来、ウィーン学団の経験主義ないし実証主義の伝統は学術言

語がすべて経験にもとづいて実証されうるものであることを要求する。ところが、多くの社会科学の用語は全くこの要求に合わない。それゆえに、人文・社会科学を含むあらゆる科学言語をすべて統一的に、時間空間的に実際に観察計測しうる物理主義言語に改めることから始めなければならない。意味の一定した明確さがこの物理主義言語の特色である。例えば、「この時代の建築様式には日本精神がよく現われている」という代りに「この時代の建築物にはかくかくの線や釣合が多く見られる」というように書くことにする。「歴史的使命に迫られて、その国民はかれらの文明を近隣に広めはじめた」と書く代りに「A群の人間がB群の人間を殺し、その建物や書物を破壊しはじめた」と率直に言い切るようにする。この規準からすると、「社会の上部構造・下部構造」というような語句ももちろん落第である。しかし、このような「物理主義統一言語」の実行が言うほど簡単ではないことは、そのような根本方針を貫いて書かれた社会科学書が皆無であることを見ても分かるのである。

ウィーン学団にはこの統一言語即統一科学という正統派スローガンのほかに、もっと大胆なオットー・ノイラートの統一科学即大宇宙史の構想もあった。要約すればそれはこうである——森羅万象、自然現象も社会現象も、みな同じ一つの巨大な空間の中に、一つの無限の時間の中に続き繋がって生起しているのであって、科学の分類などただ便宜上のことにすぎない。星雲や銀河や太陽

や地球から、光線や素粒子や原子や分子、それに微生物や植物や動物や人間や都市や国家等々にいたるまで、それら総ての事象を取り扱うところの真に総合的な「大宇宙史」というようなものの中にこそ「統一科学」は実現されなければならない。物理や化学の法則も要するに巨大な宇宙の歴史の比較的長い一期間における物体の運動や物質の性質の安定性を示しているに過ぎない。科学も事実を事実として認識しようする点では歴史と変わらない。科学もつまり一種の歴史である。巨大な宇宙の歴史の一部である。すべての自然科学も社会科学もみなこの巨大な歴史の認識の中に包括されてしまう。このような「大宇宙史」こそそのまま、「統一科学」にほかならない。

「大宇宙史としての統一科学」の構想がただ理念として考えられるだけで、実現不可能であることは、先の「統一言語による統一科学」の場合より以上である。たとえば、多少とも実質的に考えようと試みる人があっても、ただちに、それが幾通りにも可能であって、到底それによって唯一の正しい科学的統一哲学すなわち人類世界の思想統一など望むべくもないことを思い知らされるであろう。そうして、多宗教・多文化・多思想対立の現代人類世界の再現に当面する結果になり、ここでもまた、われわれは思想的寛容の重要性を再認識させられるばかりである。

* 戦後ウィーン学団が渡米して、諸他の科学統一運動を糾合して計画した全二十六巻の『統一科学の国際百科全書』は、結局、基礎論部二巻

(Foundations of the Unity of Science, 2 vols., Chicago, 1970) だけに終った。なお、本章の叙述は、旧著南窓社版『一般認識論』第四章の「科学統一論」に負うところが多い。

4

現代はよくポストインダストリアル・情報化時代であると言われる。たしかに科学技術の急激な発展は各分野に爆発的な知識の増大、言い換えれば情報の氾濫を来たしている。コンピュータの助けなしではどうにもならない。しかも、そのコンピュータがまた情報の氾濫に輪をかけるというのだから、始末がわるい。そのような事態に対処するために、真空管が半導体にとって代ってから一変したトランジスタ技術は、その後IC・LSI・超LSIと急速に性能を高め、情報伝達から情報処理さらに情報提供とサービス機能を拡大して、最近では、いわゆる第五世代コンピュータとして「日本の世界に対する挑戦」とさえ噂されているところの、ハードウェア機構自体を含む原理的革新にさえ乗り出している。人間のような思考力をもった人工知能を造るのだと淵一博氏を頭目とする日本の若き技術陣は張り切っている由である*。

情報科学の本来本元であるアメリカでは、組織的に各知識分野の情報を収集・蓄積して、最新情報の選択的配布や基本情報の週及的探索等のサービスを公共的または商業的に行なうために、いわゆるデータベースの構築がすでに大規模に進められている。人

間の営みがすべてデータ情報の的確な把握に基づかねばならぬものとするならば、このようなデータベースの活用如何にこそ二十一世紀に向かっての社会の生存力の鍵があるのだと言わなければなるまい。

しかしながら、このような情報技術の世界的発展によって、近い将来すべての国際紛争も客観的・科学的に解決できるようになるだろうなどと早合点してはいけない。収集された情報量がふえればふえるほど、処理や整理の仕方も複雑になり、提供される選択肢も多様化するであろうから、唯一の正しい行動戦略が端的に出てくるようなことはまずない。例えば、やがて臨床医の診察や治療に役立つようにと、内科専門医の知識ベースを体系的に組み込んだ医療用コンピューターでも、最終的には使う医者自身の選択と決断を要求しているようであるし、また、ある企業がある新しい企画の政策決定をするような場合でも、起こりうべきあらゆる事態を詳しく調査した上で、可能なる極大損失を極小ならしめるような戦略を決定することはコンピューターにも出来るであろうが、そんな安全策ばかり取ってはいは、はたして業界の激しい生存競争に勝ち残れるかどうか疑問である。まして、国際紛争ともなれば問題はいつそう複雑微妙で、多くの場合、双方それぞれに決定した譲り難い自己主張をもっていて、いくら客観的なデータや数字をコンピューターで出して来たとしても、それはただ隠れた自己主張をカムフラージュする道具として使われているだ

けの場合も少なくない。表向きは双方とも世界人類のために最善の解決策を見出そうなどと理論的な論陣を張っても、裏ではたいてい利己的欲望が蠢いているのである。

それゆえ、コンピューターによる情報の国際化やその処理方法の均一化に、世界全体の平和的思想、統一の望みを託することなど、今のところ全くナンセンスである。うっかりすると、そのような空想みはそのまま、オーウェルの有名な問題小説『一九八四年』が空恐ろしくも描き出しているような、完全な行動監視と思想統制の警察国家を世界中に造り上げてしまうような結果になるかもしれないのである。いや、よく考えてみれば、現代の進歩したエレクトロニクスやコンピューターの技術は、むしろ、そのような方向に走る危険性を多分にもっているのである。

そのような危険性を避けるためには、多宗教・多文化・多思想の相対立する現代人類世界の現実に対して、われわれはやはり自由な思想的寛容の精神をもって勇敢に立ち向かってゆく以外に道はないのではあるまいか。

* 参照 E. A. Feigenbaum - P. McCorduck : The Fifth Generation—Artificial Intelligence and Japan's Computer Challenge to the World, New York, New American Library, a Signet book, 1984 (改訂版)。本書は表紙の自由の女神像の顔が日本人(淵一博氏)の顔に入れ代えられているという話題のペーパーバックの本である。

元来、われわれ人間仲間とは同一の生物種に属するのだから、同一の宗教、同一の言語、同一の文化をもつていても決しておかしくないわけであるが、不幸にして現実にはそうでない。大宇宙の中の一小惑星の上ながら、かれらの群棲し慣れた土地の相異なるように、それぞれの気候風土への久しい適応を通して、皮膚の色や顔形が違うように、言語も宗教も生活習慣も相当に違っている。その違いの依つて来たる所以を科学的に人間的に理解し合ふことがまず肝要である。

さいわい、現代のライフサイエンスの知見は、人間の行動の自由度がDNAを通じて微生物の行動の自由度に源し、人間の思考の自由と秩序とがともに「文明を作る動物」としての社会生物学的進化の過程そのものに根ざしたものであることを明らかにしつつある。われわれ人間は、科学の客観的知識を超えて自由に理念を形成することによって、いろいろな気候風土の異なった地域に、大筋では同一生物種としての進化の線に従いながらも、現在見られるような多種多様な文化を建設してきたのである。なるほど、われわれ人間の幾重もの枠にはめられた自由はあまりにも小さい。しかし、この小さな自由なくしては人間らしい生活はない。また、この小さな人間的自由が如何に偉大なるものを創造してきたかは、歴史を見れば一目瞭然である。

前章までの所論において、われわれは、どちらかといえば、世界人類の思想統一に憧れながら、むしろやむなく思想的寛容に救いを求めてきたのであったが、実は、この自分が自由に考えるのと同じように他人にも自由に考えることを認めるということは、われわれ人間の真の自他認識（仲間意識）の基盤であって、これこそ、すべての健全なる人類共同体成立の不可欠前提である。本当は、けつして単にやむなく学んだ「歴史の教訓」というようなものではなかったのである。

今日平和について語るとき人はすぐ核兵器のことを思う。しかし、核兵器を使うのは人間である。戦争するのも人間である。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とユネスコ憲章の前文にあるが、その「心の中のとりで」というのは、本論文の結論によれば、正に思想的寛容でなければならぬ。われわれは核兵器を恐れる前に、われわれ自身の心の中の思想的不寛容（intolerance）をこそ恐れなければならない。

（おおえ・せいぞう、科学哲学・文化哲学、

生存科学研究所顧問）